

タイトル：「言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツ
ー諸語の隣接言語の記述研究」（2009年度第1回研究会）

日時：2009年9月12日（土曜日）午後1時半より午後5時

場所：AA研セミナー室（301室）

報告者名（所属）：河内一博（AA研共同研究員，防衛大学校）

報告タイトル：Sidaama語の名詞句に関わる問題

内容：インフルエンザ騒ぎで夏前に予定していた研究会日時を急に変更したこと、また、多くの
大学が夏休み中であったことから、研究会メンバーの多くが海外出張中や海外調査に出かけてい
たために、出席者が少なかった。しかし、河内氏の研究発表は、内容の豊かなもので予定してい
た時間を大幅に超えて議論が白熱した。次回の研究会開催は、11月14日を予定している。

「言語接触と系統継承」研究会 発表報告書

河内一博

題目： Sidaama 語の名詞句に関わる問題

日時： 2009年9月12日（土）午後1時30分～5時

場所： AA 研 301 室

本発表では、Sidaama 語の社会文化的情報と文法の概観を述べてから、この言語の名詞句に関
わる次の三つの話題を扱った。

- (1) 名詞句における「修飾」
- (2) 名詞句の格の標示
- (3) 名詞のない名詞句

具体的にはそれぞれ、以下の問題を扱った。

- (1) 「修飾」という概念は普遍的か？
- (2) Sidaama 語（およびハイランド・イースト・クシ語派の言語）は有標主格
（marked-nominative）言語か？
- (3) 名詞句に主要部はあるか？

それぞれの論点は以下の通りである。

(1) 他の言語（例：ペルシャ語、ヘブライ語、アラビア語）では名詞が修飾されているかの区別は統語的修飾語（句）の有無に関するものであり、統語論でも伝統的に修飾は統語的概念として扱われてきた。しかし、Sidaama 語での、名詞句における“修飾”という概念は、多くの場合、統語的であるだけでなく形態的であり、普通名詞に連体修飾語（形容詞、数詞、数量詞、連体指示詞、属格の名詞句、関係節）が伴うことだけでなく所有人称接尾辞が付くことも含まれる。この言語では、普通名詞が統語的または形態的に“修飾”されているかどうかによって、格の接尾辞の異形態の違い等の7つの文法的区別が成される。ところが一方で、通常統語的な修飾をもとに文法的区別が成されることもあり、この言語内でも一貫性がない。

(2) 以前の研究では、Sidaama 語は有標主格の格のシステムを持つ言語として扱われているが、実はこの言語は対格型の言語である。従来の記述では、対格の suprafix が見落とされている。修飾語（句）を伴わない場合には、ほとんどの男性名詞は他動詞の主語、自動詞の主語、目的語として使われたときにそれぞれ標示があり、女性名詞と一部の男性固有名詞は目的語だけに形態的標示があるので対格型の典型的特徴を示している。さらに、Christa König (2006) の機能的有標性の基準（引用形式として使われる/名詞が述部に来るときに使われる/デフォルトの形式として様々な場合に使われる）を使うと、Sidaama 語では、対格は機能的に無標ではない。

(3) 名詞句の主要部は当然名詞であると思われることが多いが、Sidaama 語のクリティックを使って形成される名詞句には、他のどの仮説よりも、一般に名詞句には主要部はないという仮説 (Dryer 2004) がよりうまく適用できる。形成される名詞句の格と性によって変化をする Sidaama 語のクリティックは、次の場合属格の名詞句または関係節の動詞に付く：(1) 名詞句の指示対象の範疇を表す名詞を使わずに、述部または項の名詞句を形成する場合、(2) 属格の名詞句または関係節が修飾する名詞の直前に別の修飾語（句）がその名詞を修飾する場合。主要部とみなすことのできる名詞が(1)の名詞句にはないが、(2)の名詞句にはあり、(1)で、主要部の名詞が省略されているという分析や、何か（例：クリティック）がヘッドであるという分析はできないので、どの用法においても主要部という概念は必要ではないという仮説が当てはまる。したがって、Sidaama 語の名詞句において、名詞が“修飾”されているかどうかは形態統語的に示されるが、名詞句の主要部が名詞であるという形態統語的根拠はない。

それぞれの話題に関して議論がなされた。特に以下の3つの点に関して最も活発な議論が交わされた。

(1) 接辞が伴うことが修飾とみなされない理由：発表者は、言語学で修飾は伝統的に統語的概念を表すという点と、他の言語では接辞が伴うことを修飾と言える根拠がないということを指摘した。

(2) 機能的有標性の定義の難しさ：König (2006) の言うような基準が当てはまるか疑問である。

(3) いくつもの用法があるクリティックの同じ言語形式としての扱い：いくつもの用法があり格変化をするクリティックは同じものとして扱ってよいのか？ 特に補文形式として使われる場合、対格の女性の形式に限られているので、他の用法で使われる場合とは違うのではないか？